

Title	マリアンネ・ウェーバー著 大久保和郎訳 マックス・ウェーバー I
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.10 (1964. 10) ,p.845(85)- 846(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19641001-0085
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641001-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

多いこと、等が指摘できるであろう。

我々は、各自がもつ問題意識に応じて、必要な論文、論議を実際に本文に当って読み、そこから何等かの考えのヒントなり方向づけをえて、一層の理論展開を自らめざすことが、本書のもっとも有効な利用法であり、かかる会議の有用性を実証することにもなると思われる。本書は、この意味で、大いに参照され、論究するべき多くの萌芽、方向づけ、ヒントをもつものとして貴重であろう。

(注1) これまでにIEAの主催による会議をまとめたものとしては次の各書がある。

- Ed. by H. S. Ellis and H. C. Wallich, *Economic Development for Latin America*.
- Ed. by D. C. Hague, *Inflation*.
- Ed. by D. C. Hague, *Stability and Progress in the World Economy*.

- Ed. by E. Lundberg, *The Business Cycle in the Post-War World*.
- Ed. by A. Lutz and D. C. Hague, *The Theory of Capital*.
- Ed. by R. A. Musgrave and A. T. Peacock, *Classics in the Theory of Public Finance*.

Ed. by E. A. G. Robinson, *The Economic Consequences of the Size of Nations*.

Ed. by B. Thomas, *The Economics of International Migration*.

(注2) 本書の「ついで」次の会議録が出版された。
Ed. by K. Berrill, *Economic Development with Special Reference to East Asia*, London, 1964.

(注3) ハンコックは最近この論文を、大幅に修正、拡大した次の論文を発表しており、大いに注目をひいている。

J. N. Bhagwati, "The Pure Theory of International Trade: A Survey", *Economic Journal*, March 1964.

新刊紹介

マリアンネ・ウェーバー著

大久保和郎訳

『マックス・ウェーバー』I

ウェーバーにかんする伝記や研究は非常に多い。しかしウェーバー夫人、マリアンネによる本書こそ、まさしくこの巨匠の全学問的遺産と人間的苦悩を語って余すところがないことはよく知られている。すでに古典的な文献として知られている本書は、その大部なためと難解なことも手伝って、特別にウェーバーを専攻しているきわめて少数の人々しか読まれていなかったのであるが、この度、大久保氏によって邦訳されたことは、社会科学に志すわれわれが、容易にウェーバーに近づきうることとなり、まことに喜ばしい。本書は原書の約半分をしめるものであり、後半はまだ公刊されていないのが惜しまれる。内容的には、一八六四年の生誕から一九〇四年、「社会科学方法論」として知られるかの「社会

新刊紹介

科学的並びに社会政策的認識の「客観性」という有名な論文が、ウェーバー、ゾンバルトおよびヤツフェとの共同編集になる「社会科学及び社会政策雑誌」に掲載された頃までを含んでいる。すなわち、つぎのような内容から成っている。

- 第一章 先祖、第二章 生家と少年時代、第三章 学生時代と兵役時代、第四章 上昇の一步、第五章 家庭生活と人格の発展、第六章 結婚、第七章 若き教師・政治家、第八章 転落、第九章 新しい局面、第十章 創造の新しい局面。

国民自由党の大立物の父、マックス・ウェーバー、そして敬虔で信仰深く賢明な母ヘレネ・ウェーバー、フレンシュタインの長男として生まれたマックスは、一八八二年、満十八歳でハイデルベルク大学に入学し、学問的精進の第一歩を印した。当時のドイツは、いわゆる普仏戦争の結果、勝利をしめ、イギリスに比肩する第一流の資本主義国として発展し、それにもなう諸矛盾が、ドイツ特有な諸条件に規制されて集中的にあらわれはじめた。一方において、社会民主党にひきいられる革命的労働者階級の運動、そし

て他方において依然として封建的・絶対主義権力の支柱としてのユンカー、その下僕たるの地位を未だ完全に脱却しきれぬドイツのブルジョアジー、これら三つの勢力が、さまざまな思想と政策をかかえて相拮抗しつつあった時代、そして本来、ドイツの民主政治を担うべきブルジョアジーの力の弱いために腐敗墮落、且つ沈滞していたドイツの政界、ウェーバーはこうした時代において、その時代の苦悩を自己の苦悩として、ブルジョア的思想家として、同時に社会学者として、誠実に真摯に生きようとしたのである。

わが国においては、ウェーバーを口にするのが、いわばひとつの流行とさえなりつつある。しかしもし学問の普遍妥当性の名のもとに、ともすれば保守的な、明らかに政治的な意図をもってウェーバーの名が利用されるとすれば、それはウェーバーの真意ではあるまい。彼の主張の根底にあるものは「曇りなき学問的認識」であり、何よりも学問がイデオロギー化することにたいする反対にほかならなかった。本書はこのような意味においてウェーバーの人となりについて理解するため、の絶好の文献であるとともに、謙虚な心をも

って彼の精進の跡を辿らうとする者には深い感銘をあたえるであろう。若い学生諸君には是非一説をすすめるものである。(みすず書房、一九六三年九月刊・A5・二七二頁・八〇〇円)

—飯田 鼎—

E・ルンドベルク著
吉野 俊彦 訳

『景気変動と経済政策』

—経済統制か金融政策か—

ストックホルム学派といえば、ウィクセル、カッセルから始まって、ミュルダール、リンドール、オーリン、ルンドベルク、B・ハンセンなど、いずれも世界の学界の進歩を批判的に摂取し、また現実主義的な理論の拡充に貢献した業績が、高く評価されている。北欧のエコノミストには、アメリカとはまた異質なプラグマティズムの伝統が、底流としてひそかに流れているようである。けれども、北欧の人達にとって、もっと大切な伝統は、「あらゆる種類の自由」であろう。経済的自由もその一つである。この部厚い本

を読んでいると、辛抱強い北欧の経済学者が、何を求めて苦心惨胆しているのか、行間にも覗いて興味をそそるものがある。

私がこの本を面白いと思うのは、スウェーデンの経済学者の胸にある、「北欧的自由」の精神が、一本背骨を貫ぬいているからである。戦時中、政府の中央物価統制局長を務めたルンドベルクには、物価統制をはじめ建築統制、輸入統制、などの統制経済のもつ限界は、あまりにも痛切に心に刻み込まれたに違いない。この本の狙いは、「雇用水準と物価水準の安定、景気変動の幅の縮小等、要するに経済的安定を達成するために、一般的な経済統制ならびに特別の経済統制の發揮しうる効果を比較することである」といっている。その結果、この本では、経済政策の一般的手段である財政・金融政策こそが、民間の自由な経済活動と相まって、安定的な経済成長を達成する上で、最も弊害の少ない政策である、と考えられている。

ここまでは、格別新しいことでもない。問題は、経済安定のために有効な財政・金融政策のあり方である。第四章「経済政策の目的と手段」、第六章「一九四五年以降における

スウェーデンの通貨政策の目的と手段」、第八章「インフレーション・ギャップ分析と国民経済予算の作成」、第九章「財政政策の可能性」——ここに盛られた経済政策の考え方では、「可能性の技術」としての政治的過程により、政策目的が与えられると、その目的を達成するための種々の手段の間の評価が与えられねばならない。その前に、経済情勢のできる限り正確な予測もなければならぬ。その上で、異なった手段の組み合わせが決まることになる。だとすれば、この本は、ミュルダールとティンベルヘンB・ハンセンをつなぐ一線において、読まれてしかるべきであろう。

北欧の経済学は、地味ではあるが、息の長い伝統を持っている。戦前・戦後を通じて、わが国にもその伝統は、ひそやかにあるが移植の過程が続けられてきた。わが国の土壌に根を張って、すぐに育つというはずもないが、長い眼で見れば、文字通りの成長株として育つことは間違いないと思う。その意味で、経済学に関心を持つ人々に広く薦めたい。

(至誠堂・A6・三八九頁・一三〇〇円)

—古田 精司—

J・ティンベルヘン著

清水 幾太郎 訳

『新しい経済』

「過去半世紀の世界経済の歴史から、わたくしたちは何を学ぶべきか」という問いに対する一つの回答が、この本のすべてである。近頃では、こういうテーマをとりあげた本はそう珍しくはない。珍しいことといえば、これまで堅苦しい題名の本ばかりだしていた著者が、広く専門外の人々に平易な言葉で呼びかけていることであろう。扱ったテーマがテーマだけに、斜めに読みとばせる本ではないが、だれが読んでもその人なりに得るところはあるはずである。

はじめに、過去五十年間の西・東・南(先進資本主義諸国、社会主義諸国、低開発諸国)三大地域の経済的社会的発展を概観する。今日わたくしたちの共通の関心となっている「東西対立」について、この本では「楽観的」な結論が引きだされる。「東西双方の経済制

度は共通の最適、つまり、混合制度へ向って動いて行くであろう。すなわち、西の制度には社会主義という要素が増し、東の制度には能率という要素が増すであろう。……双方の側に教理からの離脱の余裕が生まれるであろう。国際的統合は続くであろう。」

いま一つの大切な問題は、いわゆる、「南北問題」である。「南」、つまり低開発諸国の経済的停滞と不安定、低所得を、工業諸国の協力によっていかに克服できるか、という問題である。経済開発自体は、当の低開発諸国がその解決に努めるべき課題かもしれないが、「北」、すなわち、「東西両体制」は、その解決の過程で両体制の優劣が、南から問われることになる。「南は東と西とを見ている」。つまり、低開発諸国は、みずから選ぶべき未来への道を求めて、東の共産主義体制と西の混合体制との競争の動きに注目しているのである。

東・西・南の諸国が、それぞれ抱えた問題群は全く異質的で、したがって解決策もその国々で違うのだ、と普通には信じられている。この本では、「現在、ひどく違った環境および見解を持つ国々の政府が作る経済政策の目

標の間には、実際は、考えられるほどの開きは存在しないのである」と割り切っている。つまり、東・西の経済制度がますます接近するばかりでなく、南も含めて、「繁栄と調和の世界の建設」への協力ができるのだ、というのが、この本の結論である。

昨年この原書がでて以来、「久しぶりに読書の喜びを味わった」という声や、「ティンベルヘンはお人好しだネ」という声も聞いた。まさに毀誉褒貶である。どちらも真実の声であろう。しかし、核時代に生きる北欧の小国の人達は、この種の問題となると、身近かな事柄として受けとめてひどく真剣になる。やはり、著者が立っている基盤を考えると、この本も読むべきであろう。とりわけ、大学二・三年生向きとして薦めたい。

(岩波新書・二〇八頁・一三〇〇円)

—古田 精司—